

感動詞「ええ」の派生的用法について

——苛立ち・不満を示す場合——

富 樫 純 一

1. 問題の所在

感動詞「ええ」にはイントネーションの異なりによっていくつかの用法があることはよく知られている。富樫（2005）では、下降調イントネーションの「ええ」は肯定、高平調イントネーションの「ええ」は検索、上昇調イントネーションの「ええ」は問い返し、というように、「ええ」という形式には3種類の用法があると指摘している。

しかし、次の例(1)(2)に見られる「ええ」はこれら3種類のどの用法にも当てはまらなれないと思われる。

- (1) お前なんかは何もできんじゃないか。タイプもソロバンも。ええ?
(赤川次郎『女社長に乾杯!』)⁽¹⁾
- (2) ええ、おい、どうだい、信じられるかい? 九万五千ポンドって賭金が、霧みたいに消えちゃったんだぜ!
(シリトー『長距離走者の孤独』(丸谷才一・河野一郎訳))

(1)の発話は、相手が何もできないということに対して、苛立ちや怒りの感情を表出している。発話末に「ええ?」が付加され、その感情を相手にぶつけるような態度が強調されている。(2)の発話においても、自分にとって信じ難い出来事が起こったことに対する苛立ちの感情が示されており、発話頭に「ええ」が用いられている。

また、次の(3)のような「えーっ」も、肯定・検索・問い返しのいずれかの用法に当てはめて説明することは難しい。

- (3) 先生 これからテストをします。
生徒 えーっ。やだー。

(3)は、抜き打ち的にテストが行われるという事態に対しての反応である。生徒の発話「えーっ」は後続の「やだー」とともに不満の感情表出を担っていると考えられる。

本稿では(1)(2)のタイプを「苛立ちの「ええ？」」、(3)のタイプを「不満の「えーっ」とそれぞれ呼ぶことにする。いずれも核としてあるのは、「ええ」という形式である。よって、これらは感動詞の「ええ」が持つ本質的意味から派生した用法であると位置付けられる。

苛立ちや不満を示す用法が独立的に「ええ」に認められることを指摘している論考はほとんどなく、これまでその諸特徴は詳細に記述されてこなかった。その理由の一つとして、実際の出現頻度がそれほど高くなく、加えて、ネガティブな態度を表出するこれらの用法は、収録の対象として可能となるような自然な（あるいは用意された）談話には現れにくい点という点が挙げられるだろう。

以下では、先行研究の理論的基盤を踏まえつつ、苛立ちの「ええ？」および不満の「えーっ」の文法的制約や意味・ニュアンスの特徴の記述、および派生プロセスの考察を試みる。なお補足しておく、本稿で対象とする「ええ」はいわゆる自然談話資料では見つけることが限りなく不可能に近い点、いくつかの例は小説資料から得たものを示している。

2. 先行研究の概観

感動詞「ええ」にさまざまな意味や用法が存在することは、従来から指摘されている。しかし、上昇調イントネーションを伴う苛立ちの「ええ？」はいわゆる問い返し、驚き、意外に含まれる形で一括りにして扱われることがほとんどである（田窪・金水（1997）、日本語記述文法研究会（2009）、中島（2011）、浅田（2017）など）。また、不満の「えーっ」も意外の一種、あるいは驚きの一種として捉えられやすい。富樫（2005）でも「えーっ」は驚き表明の形式であるとしている。

村上（2018）は、ドストエフスキーの小説『悪霊』の翻訳に見られる「ええ」の派生的な用法について「念押し」「苛立ち・憤り」を示すものと捉え、驚きや意外を示す用法と区別している。そこに注目した唯一の論考であろう。ただし、対象が一作品に限定されており、しかも複数の翻訳者による訳出の傾向の比較が分析の主眼となっている。そのため、「念押し」や「苛立ち・憤り」の用法そのものがどういった文法的特徴を有しているのか、といった点には言及がなされていない。また、「念押し」と「苛立ち・憤り」との区別に関わる概念規定が不明確であるという問題点もある。⁽²⁾

不満の「えーっ」については、そのあり様を指摘した論考もあるが（定延（2005））、なぜ不満を示すのか、なぜ「ええ」という形式が用いられるのかという点に関して詳細に触れたものはない。

また、感動詞「ええ」の統一的な記述を試みた富樫（2005）では、上昇調イントネーションの「ええ」について、獲得した情報に対して適切な関連性の確保に失敗したことを示す、と分析している。しかし、この説明はいわゆる問い返しの用法に関してのものでしかなく、苛立ちや不満といった派生用法については扱われていない。

先行研究においては、苛立ちや不満の用法についてこれとって注目されておらず、詳細な分析がされてきたとは言いがたい。

3. 苛立ちの「ええ？」

3.1. 音声・形式・表記

3節では苛立ちの「ええ？」について分析していく。まずは形式的な特徴を押さえておこう。苛立ちの「ええ？」は基本的に急激な上昇調のイントネーションで発話される。郡（2018）の「感動詞の不可解イントネーション」に近いものといえる。問い返しの場合よりも上昇が激しくかつ長く発音されやすいが、長音要素が必須というわけではなく、(4)のように短い「え？」でも苛立ちを示すことは可能である。その場合、声質のほうが強調される傾向にある。

- (4) 大将株の少年が、またもやふところに獲物のコマをしまいこみながら、軽蔑したように言った。「おまえ、やんのかい、え？」

（北杜夫『楡家の人々』）

本稿で扱う苛立ちの「ええ？」を本文中では「ええ？」で統一して表記する。ただし、小説の例は原文どおりとする。

3.2. 苛立ちの「ええ？」の諸特徴

本節では苛立ちの「ええ？」の制約や特徴を分析していく。まず次の例を見られたい。

- (5) お前、やるのか、コラ。ええ？
(6) お前、ええ？ やるのか、コラ。
(7) ええ？ お前、やるのか、コラ。

- (8) この人はな、コミッショナーの人だから、訊いてみろよ。いったい誰がほんとのマネージャーか、ええ、訊いてみろっていうんだよ

(沢木耕太郎『一瞬の夏』)

一つ目の特徴として発話位置が自由である点が挙げられる。(5)(6)(7)から分かるように、発話末でも発話途中でも発話頭でもかまわない。問い返し用法の「ええ」と同様に(富樫(2005))、発話の中で比較的自由に「ええ?」が差し挟まれやすい。どの箇所でも「ええ?」で苛立ちの感情を示すことが可能である。(8)のような文節末で現れても不自然さは見られない。

さらに特徴的と言えるのは、発話末に現れる「ええ?」が一意に苛立ちの解釈となる点である。

(9)A 明日の13時に集まってください。

B ええ? 何時だって? / 何時だって? ええ?

(9)において、発話末の「ええ?」は問い返し用法と解釈できない。「13時(に集まる)」という情報に対しての反意・反論の意図が含まれており、情報の単なる確認・問い返しと捉えることはできないのである。

さらに次の(10)(11)でも違いが見て取れる。

(10)??何て言ってんだ? ええ?

(11) 何言ってんだ? ええ?

(10)における「何て言ってんだ」は聞き取れなかった情報を問い返すという解釈しかできないが、(11)における「何言ってんだ」には比喩的な意味が加わる。自分にとって不必要な関係のないこと、あるいは自分とは逆の考えであることを非難するようなニュアンスが加わっていると解釈できる。(10)の発話末「ええ?」が不自然となる一方で、(11)の発話末「ええ?」は違和感が無い。非難の対象となる事態であることを、発話末の「ええ?」によって表しているのである。このことから、この「ええ?」は問い返しとは異なる用法であることが分かるだろう。

二つ目の特徴として、独り言で発話できる点が指摘できよう。

(12) (機械を操作していて) ええ? どうして動かないんだ、これ。

(13) あの人たちがほんとうに自分たちの肉を手に入れるただ一つの道をわかっ
てくれたらなあ——ええっ、くそっ!

(スタインベック『怒りの葡萄』(大久保康雄訳))

- (14) 俺だって潰瘍さえ癒りゃ、こんなとこで衛生兵の御機嫌なんかとっちゃい
ねえ——ええ、畜生 (大岡昇平『野火』)

(12)は「(機械が)動かない」という情報そのものに対しての問い返しの行為、つまりは疑念の表明とも捉えられるが、動かない機械に対しての怒りや悪態の行動とも取ることができる。そのため、イントネーション的には問い返しよりも急激な上昇調となる。

独り言の場合、発話位置に自由さは無くなり、必ず発話頭に位置する。さらに「くそ」「畜生」など、苛立ちを具体的に言語化した語句が後続しやすい(13)(14)。苛立ちという感情表出を「ええ？」で表し、その後で改めてより明確な表現で苛立ちを表している。

一方、発話末に「ええ？」が現れる場合には必ず対他的な苛立ちの表明になる。

- (15) 今日は暑いなあ、ええ？

- (16) 話をつける？ どうして俺が手前なんかに話をつけられなきゃならねえんだよ、ええ？ (沢木耕太郎『一瞬の夏』)

これらは他者に対しての苛立ち・怒りを示す。(15)は「暑いなあ」で終わると、話し手の感情の吐露にしかならないが、「ええ？」が加わることで、例えば暑さによる不快感を他者にぶつけている、といった解釈になる。

苛立ちの「ええ？」には対他的なタイプと独り言的なタイプがあり、対他的なタイプは、発話位置が自由ではあるが発話末に現れる傾向が強いといえる。そのため、苛立ちの要因となる事態が「ええ？」の前に示されやすい。それと異なり、独り言的なタイプは発話頭に位置が限定され、その直後に苛立ちを言語化した表現が現れる傾向にある。

三つ目の特徴として加えておきたいのが、情報の獲得という前提が必要であるという点である。つまり、苛立ちや憤り、怒りの感情が生じる要因となった出来事や発話が無ければ「ええ？」を発することができないのである。例えば発話末「ええ？」を見てみると、その直前に「ええ？」につながる要因が明示されている。独り言であっても、要因の認識は不可欠である。

3.3. 苛立ち「ええ？」の用法はどのようにして生じるか

対他的な苛立ち「ええ？」も独り言の苛立ち「ええ？」も、問い返しの「ええ？」との連続性を有しているのは明らかである(上昇調のイントネーションが共通し

ているため)。そこで、富樫（2005）で示した「ええ」の本質的意味である「まとまった情報を獲得した上での、データベースへのアクセス」（p.89）を土台として、苛立ち「ええ？」の用法記述を試みる。

獲得した情報について、自身の心内データベースとの関連性をうまく確保することができないことが苛立ちの感情を発生させるといえる。「ええ、ちくしょう」のような独り言での苛立ち「ええ？」は、この関連性確保処理の失敗とある意味直接的に結びつく。独り言であるがゆえに、心内処理とのみつながっているのである。うまくいかなかったことに対する（自身への）憤りである。

では、関連性確保処理の失敗をコミュニケーションの場に持ち出すとどうなるだろうか。一つには失敗の要因を他者に求めようとするのが考えられる。これが問い返しである。処理を失敗した情報の再取得・再確認のために問い返しの「ええ」が用いられる。心内処理の失敗を補おうとする、シンプルな目的に根ざした行動である。

ここからさらに派生するのが、対他的な苛立ちの「ええ？」であると考えられる。失敗の要因を他者に押しつけようとするものである。要因を再確認するのではなく、他者にそのまま責任を負わせるのである。そのため、関連性確保に失敗した情報は明示されやすく、かつ先に提示されやすい。「この情報は私にとって処理に失敗した情報である。いったいどういうことなんだ。あなたに責任を取ってもらおう」という苛立ちの投げつけ、あるいは責任転嫁となるのである。したがって、対他的な苛立ち「ええ？」は、要因となる情報提示をした後の位置、つまり発話末に現れやすく、その位置がもっとも効果を発揮するといえるのである。

いずれも関連性確保の処理の失敗という、感動詞「ええ」の上昇調イントネーションに共通の心内処理が前提にあるといえるのである。ここからそれぞれの用法（苛立ち（独り言・対他的）と問い返し）を⑦のようにまとめることができる。

(17) 《独り言における捉え方》

・失敗に対する直接的反応 ⇒独り言の苛立ち

《コミュニケーションの場における捉え方》

・失敗の要因を他者に求める ⇒問い返し

・失敗の要因を他者に押しつける ⇒対他的な苛立ち

心内処理に直接的に基づく自己の感情表出から、他者への感情の投げつけへと派生していく。感情の投げつけは他者への方向性を持つため、要因の明示がある程度必要となる。その意味で、対他的な「ええ？」は自身の苛立ちの表出というよりも他者への煽りのような効果が強調されやすいといえる。

4. 不満の「えーっ」

4.1. 音声・形式・表記

次に、不満の「えーっ」について見ていくが、まずは形式的な特徴を押さえる。もちろん核となるのは「ええ」という形式であるが、他用法の「ええ」と異なり、不満の感情を示す場合は長音要素が不可欠であるといえる。他用法よりもある程度の長さが発音に必須である。短い発音だと他用法との区別が付きにくいように思われる。また、イントネーションについても特徴的なことが言え、定延（2005）のいう「じりじり上昇」の音調であり、それほど急激ではないゆっくりとした上昇調で発音される。始まりが高い場合も低い場合もあるが、低く始まるほうがより不満の感情が強調される。

不満の「えーっ」について、本文中では基本的に「えーっ」で統一して表記することとする。

4.2. 不満の「えーっ」の諸特徴

ここでは不満「えーっ」の特徴を確認していく。一点目として、発話位置について見てみる。苛立ち「ええ？」が自由に発話可能であるのと異なり、不満「えーっ」は発話頭にしか現れることができない。

(18)先生 明日の遠足は中止です。

生徒 えーっ。やだー。 /??やだー。えーっ。

(18)は「遠足が中止になる」という情報に対して不満を表明するという状況である。不満の感情を言語化した「やだー」で先に反応をし、その後に「えーっ」を発話するのは非常に不自然である。だが、次の(19)のように、不満を生じさせる情報を自身で言語化した場合、「えーっ」が後続することは可能である。

(19)先生 明日の遠足は中止です。

生徒 中止？ えーっ。

ということは、厳密を期すならば、不満の起因となる情報の直後で、かつ他の不満表現が明示される前が、不満「えーっ」が現れうる位置であると捉えられるだろう。

二点目として、対他的側面について考えてみる。情報を提供した相手に不満を

表明する cases に限らず、独り言での「えーっ」発話も可能である。

(20) (授業を受けようと教室に入ったら満席で) えーっ。

(20)は独りで教室に入るという状況である。周りに友人などの聞き手が存在していても、不満の感情を「えーっ」によって表出することができる。つまり、不満の起因となる情報の獲得が「えーっ」という形式と直接的に結びついており、独り言か対他的かは副次的な問題であるといえる。不満を他者にぶつけることに本質があるのではなく、得られた事態に対する不満の表出が「えーっ」の用法の本質であると捉えられるのである。

付け加えると、独り言であっても、他の不満表現が明示される前という原則は守られる。

(21) (20の状況) えーっ。困ったなあ。 /??困ったなあ。えーっ。

不満の感情を具体的に言語化した「困ったなあ」の後に「えーっ」を発話することはできない。

三点目として、4.1節で述べたように、長音要素が義務的な点も特徴の一つとして挙げることができるだろう。

(22) えーっ。やだー。

(23) えっ。やだー。

(23)のような短い「えっ」では不満の感情は読み取りにくい。長音要素の存在が不満という感情と何らかの形で結びついていると考えられる。

4.3. そもそも「不満」とは何か、そして派生の道筋

上で不満の表出と言ったが、そもそも不満の感情はどのようなプロセスで発生するのだろうか。重要なのは、不満を感じるためには、獲得した情報に「意外性」というラベルが貼られなければならないという点であろう。⁽³⁾

意外性のラベル貼りには話し手の心内に何らかの想定があるという前提が必要となる。獲得した情報とその想定との不整合を起し、意外性のある事態として認識される。そして、意外性を起点とする感情が不満として発露し表出されるのである。その意味では、不満も苛立ちも根本とするところは同じである。

(18)を例に取ろう。(18)で付加されるべき状況は、「明日遠足が行われる(はず)」

という想定である。

㉒ (明日遠足があると生徒は思っている) ⇒想定・前提的認識

先生 明日の遠足は中止です。 ⇒それを否定する情報の提示

生徒 えーっ。 ⇒意外性の認識⇒不満の表出

不満「えーっ」を発話するためには事前の想定が必須であり、それと実際の獲得情報との不整合が結果的に不満という感情を引き起こすのである。いわば、受け入れ難い意外性に基づく感情表出とでも言えようか。それに比して、苛立ちの「ええ？」のほうはそこまで厳密な想定が必要なわけではなく、その場での関連性確保の失敗という処理がトリガーになっていさえすればよいといえる。

したがって、事前の想定が意外性を生み出さない場合には、不満「えーっ」を発話することが不可能となる。例えば、「行列のできる人気店」に行くとしよう。事前の想定は「この店はいつも行列ができる」である。そして実際に行ってみると案の定、人がたくさん並んでいた。その時に不満の「えーっ」を発することはできない。

㉓ (行列ができる店だと知っていて、実際に行列で) ??えーっ。

「行列のできる人気店」であろうが、「明日の遠足」であろうが、とにかく話し手の想定どおりであれば不満は生まれようがないのである。逆に言えば、不整合さえ発生していれば「えーっ」発話は対他的、独り言関係なく発話できる。不整合となる情報が何によってもたらされたかで、他者からならば対他的な不満表明になるし、自ら得た情報からならば独り言的な不満の表出になるのである。

さて、なぜ不満「えーっ」には長音要素が義務的であるのかという点について考えてみたい。

森山 (2004) では感動詞・終助詞の「引き延ばし音調」(本稿で言う長音要素の付加)について、「実時間的に感情や認識を持続的に経験するという意味になる」(p.248)と述べている。しかし、不満「えーっ」はもともと長音要素なしには成立しない用法である。先に見たとおり、短い「えっ」では不満の感情は顕現しない。長音要素の必須性には別の観点が関わっていると思われる。

そこでイントネーションの特徴に目を向けてみよう。不満「えーっ」はじりじり上昇で発せられるが、定延 (2005) はじりじり上昇の意味を「自分は何らかの悪い事態を意識している」(p.13)と捉えている。

事前の想定との不整合は話し手にとって悪い事態である。よって、それに関す

る表現をじりじり上昇で発話することが可能となる。しかしそこで選択される表現形式は関連性確保に関わる「ええ」である。このままでは短すぎて、じりじりと上昇させていくことができずに終わってしまう。それを回避するために「ええ」が引き延ばされて「えーっ」のようになると考えることができる。⁽⁴⁾

このことは、「えーっ」の引き延ばしはじりじり上昇を伴いつつかなり長くすることができ、そして長ければ長いほど、不満表出の度合いが強くなることも傍証となるのではないか。

㉔先生 これからテストをします。

生徒 えー。

生徒たちが口を揃えて不満を表明するような状況では、㉔のようにかかなり長いじりじり上昇の「えーっ」になりやすい。これがより強調された不満として解釈されるということは、基本である「えーっ」にもともとじりじり上昇のイントネーションが組み込まれていることになる。

5. 二用法のまとめ、および関連事象

本稿で取り上げた二つの用法の分析をまとめてみよう。

苛立ち「ええ？」は問い返し「ええ」と同じ派生プロセスに組み込んだ形で説明ができる。心内処理の失敗に対する直接的反応が苛立ちの独り言としての用法、失敗の修正を他者に求めることが問い返しの用法、失敗そのものを他者に押しつけることが対他的な苛立ち（あるいは煽り）の用法、と分類することができる。特に、対他的な苛立ちの用法は発話末に現れやすいという特徴も有する。

不満「えーっ」は苛立ちからさらに派生した受け入れ難いという感情を示す用法である。長音要素の付加・じりじり上昇の音調が義務的であるという特徴がある。

いずれの用法も、感動詞「ええ」の本質である関連性確保（データベースへのアクセス）、そして上昇調イントネーションで発せられる「ええ」の本質である確保処理の失敗の表示、というそれぞれの意味から派生的に導くことができる。苛立ちと不満の特質は、どのような情報をどのように処理するのかという点の異なりから説明していくことができるのである。

もちろん、既に指摘されているように、感動詞の発話の背後に何らかの心内処理が常にあるわけではない。⁽⁵⁾結果的に表出される、苛立ちや不満といった感情をただ相手に示したいがために使用することも可能である。特に対他的な苛立ち

「ええ？」は心内処理の有無が判別しにくい。ただ相手を煽りたいから（要因など無いにもかかわらず）「ええ？」を発している場合もあると考えられる。しかし、この煽りの「ええ？」はやはり苛立ち「ええ？」、ひいては感動詞「ええ」の本質からつながっていることに変わりはないのである。

ところで、苛立ちや不満の用法は他の感動詞でも持ちうるのだろうか。感動詞「ああ」や「はい」「はあ」などは、急激な上昇調イントネーションで発することで苛立ちの用法を示すことができると思われる。

㉗ 何言ってんだ？ ああ？

㉘ 先生 これからテストをします。

生徒 はい？ / はあ？

㉗㉘はいずれも対他的な苛立ちの用法として捉えられる。苛立ちについては「ええ」独自の用法と言い切ることにはできないだろう。他方、不満の用法を担う他の感動詞は無いように思われる。

6. おわりに

苛立ち、不満という二つの用法の分析を試みたが、少なからず問題は残されている。

苛立ち「ええ？」は、特に対他的なタイプの場合、自己中心的な性格というキャラ属性が付与されやすい。立ち位置や立場が相手よりも上であると自認しているような人物像である。一方、逆に不満「えーっ」はどちらかという子供っぽい人物像であるという印象が強くなる。こういったキャラ属性の差異と派生プロセスとの関連についてはさらに考察を深めていかなければならない。

また、音調的側面については、本稿での捉え方が決して十分であるとは言えないので、先行研究の知見を踏まえながら、より詳細に観察・記述をしていくことが必要となろう。

さらに、感動詞「ええ」の構成要素に注目した場合、形式「ええ」もしくは「え」が含まれる他の感動詞との関係性も気になるところである。一つには「えい」がある。これは本稿で挙げた苛立ち「ええ？」と一部互換性を持つ。

㉙ えい、コラ！ / えい、ちくしょう！

もう一つ挙げるとすれば、やや役割語的ではあるが「うええ」があるだろう。

不満の表出との類似性を持っていると思われる。

30先生 これからテストをします。

生徒 うええ。やだー。

前節で挙げた「ああ?」「はい?」「はあ?」なども含めて、こういった類いの用法を持つと思われる感動詞についても分析対象となるはずである。感動詞の全体像、体系を描いていくためには、本稿で取り上げたような派生的な用法や関連事象も含めた広い視野が求められるのである。

注

- (1) 用例の出典については論文末を参照。なお、出典が記載されていない例は全て筆者による作例である。
- (2) 本稿では「念押し」用法を苛立ちの一種として捉えることとする。村上(2018)の挙げる「念押し」の用例は、返答の促しとして捉えられるものばかりではなく、苛立ちの感情も持ち合わせた不可分なものであると考えられるからである。
- (3) 「意外性」の概念の詳細は富樫(2015)を参照。
- (4) 他の感動詞、例えば富樫(2006)で取り上げられた否定の「いや」でも同様のことが観察できる。長音要素の付加やじりじり上昇で発話すると、相手に対する否定的な態度の表出が強調される。
 - (a) いや、それは無理ですね。
 - (b) いやあー、それは無理ですね。
- (5) 森山(1989)の「演技性」、定延・田窪(1995)の「態度の「表出」、富樫(2001)の「語用論的フィードバック」など。

用例出典

『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』新潮社。

参考文献

- 浅田秀子(2017)『現代感動詞用法辞典』東京堂出版。
- 石川創(2014)「感動詞の認識に関する音声上の問題について」『駒沢女子大学研究紀要』21, pp.31-43, 駒沢女子大学。
- 小林可奈子(1996)「感動詞についての一考察」『鹿児島短期大学研究紀要』58, pp.1-11, 鹿児島短期大学。
- 郡史郎(2018)「感動詞の高さの動きから見る日本語の会話表現のイントネーションの特徴」『大阪大学言語文化学』27, pp.69-81, 大阪大学大学院言語文化研究科。
- 森山卓郎(1996)「情動的感動詞考」『語文』65, pp.51-62, 大阪大学国語国文学会。
- 森山卓郎(1997)「一語文とそのイントネーション」, 音声文法研究会(編)『文法と音声』, pp.75-96, くろしお出版。

- 森山卓郎 (2004) 「引き延ばし音調について」, 音声文法研究会 (編) 『文法と音声IV』, pp.231-255, くろしお出版.
- 村上真波 (2018) 「感動詞「ええ」について —ドストエフスキー『悪霊』の翻訳から—」 『あいち国文』12, pp.116-105, 愛知県立大学日本文化学部国語国文学科.
- 中島悦子 (2011) 『自然談話の文法 —疑問表現・応答詞・あいづち・フィラー・無助詞—』 おうふう.
- 日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法7 第12部談話 第13部待遇表現』 くろしお出版.
- 仁田義雄 (1997) 「未展開文をめぐる」, 川端善明・仁田義雄 (編) 『日本語文法 体系と方法』, pp. 1-24, ひつじ書房.
- 定延利之 (2005) 「日本語のイントネーションとアクセントの関係の多様性」 『日本語科学』17, pp. 5-25, 国立国語研究所.
- 定延利之・田窪行則 (1995) 「談話における心的操作モニター機構 —心的操作標識「ええ」と「あのー」—」 『言語研究』108, pp.74-93, 日本言語学会.
- 須藤潤 (2016) 「日本語感動詞の音韻的な形式と意味に関する一考察 —下降音調と肯定的な応答—」 『コミュニカール』5, pp. 1-19, 同志社大学グローバル・コミュニケーション学会.
- 田窪行則・金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」, 音声文法研究会 (編) 『文法と音声』, pp.257-279, くろしお出版.
- 富樫純一 (2001) 「情報の獲得を示す談話標識について」 『筑波日本語研究』6, pp.19-41, 筑波大学文芸・言語研究科.
- 富樫純一 (2005) 「肯定・検索・問い返し —感動詞「ええ」の統一的記述を求めて—」 『文藝言語研究 言語篇』48, pp.77-93, 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻.
- 富樫純一 (2006) 「否定応答表現「いえ」「いいえ」「いや」」, 矢澤真人・橋本修 (編) 『現代日本語文法 現象と理論のインタラクション』, pp.23-46, ひつじ書房.
- 富樫純一 (2013) 「感動詞・応答詞の分析手法」 『日本語学 臨時増刊号 (特集 ことばの名脇役たち)』32(5), pp.26-35, 明治書院.
- 富樫純一 (2015) 「予想外と想定外 感動詞「げっ」の分析を中心に」, 友定賢治 (編) 『感動詞の言語学』, pp.85-95, ひつじ書房.
- 山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』 くろしお出版.